［二〇〇四年度大会パネルセッション1］特別掲載Ⅰ　鎌倉仏教研究の再検討――円爾弁円評価をめぐって

趣旨説明

市川　浩史

わたしたちは表記のようなテーマでパネルセッションを試みた。趣旨説明は市川、パネリストは吉原健雄、加藤みち子、島田健太郎の三名（発表順）、そしてコメンテーターは菅基久子である。趣旨は従来の鎌倉仏教研究のなかで見落とされてきている問題点に注目し、それを手がかりとして研究史の再検討を迫り、当該問題に関わる新たな思想史像を模索する、ということであった。そこでそのために本セッションでは鎌倉期臨済禅の円爾弁円（一二〇二―八〇）を対象として取り上げる。

鎌倉仏教、とりわけ臨済禅は栄西が招来した後、円爾らが初期禅宗の開拓者として評価されてきている。しかし、そこでは宗派史という古典的にして固定的な枠組みのなかで研究が進められてきたことなどによって通り一遍のイメージしか提示できていないように思われる。それに関してまずとりあげるべき点は宋からの渡来禅や栄西、円爾よりも少しあとの道元などの禅を「純粋禅」と評価することに対比して、栄西や円爾などの初期臨済禅を密教や天台などの「教宗」と〈兼修〉する「兼修禅」あるいは「顕密禅」、「教禅一致」「儒禅一致」などとして評価されていることである。こうした傾向は近年の研究にまで長く及んでいて、これは思想史の方法論の問題として提起されてはいない。また抑も円爾らの思想が思想史研究の対象にされたことはなかったのではないか。

本セッションが問題にしようとした宋朝から日本にもた

らされた禅がどのように円爾などの初期の禅者に伝えられ、内在化していったか、という問題は、このように従来の研究史では充分に解明されているとは言い難い。そこでこうした状況を鑑み、円爾の再評価を通して従来は明らかにされてこなかった点、さらに円爾の新しい評価を通して鎌倉仏教研究の再検討に迫りたい。具体的には、従来「兼修禅」などとして単純に〈専修・選択〉的な論理と対置されてしばしば貶称されてきた円爾の禅の思想の構造のレベルから、「兼修禅」という概念自体を相対化し、そして「純粋禅」対「兼修禅」という図式に対しても考えてみる。そこでまず問題になるのは、密教との関係如何、そして中心となるべき禅の位置付けである。円爾には『大日経見聞』『瑜祇経見聞』といった密教経典の講義録・注釈がある。また円爾段階の日本に存在していた十宗の教学内容を紹介した『十宗要道記』なる著作もある。これらの著作は、禅と密とは「一致」していたのかどうか、もし「一致」していたとすればそれはどのような論理のもとにおいてであったのか、また円爾が積極的に行った祈禱・修法など、いわば純粋ならざる顕密の行法の実践などをどのような形式・意味での「兼修」として位置づけるのか、といった課題にパネリストたちはどう答えてくれるだろうか。また、禅というものの本質が身体的行為としての坐禅において捉えられるのか、あるいは形而上性においてなのか、換言すれば本来は禅という宗教に必然的に伴う具体的、身体的な坐禅という宗教的行為をいかに思想内在化させ得たのかという問題は思想史そのものにとって重要な課題でもある。さらにこの問題は、たとえば栄西が戒律を〈興禅護国〉の問題として重視したという点などについてもあらためて考え直す必要を促すかもしれない。

独自の禅の論理と「教」の位置づけ、「兼修」をめぐる種々の配慮、「坐」という身体性の位置づけ等々の問題が以下で取り上げられる。

〈群馬県立女子大学教授〉